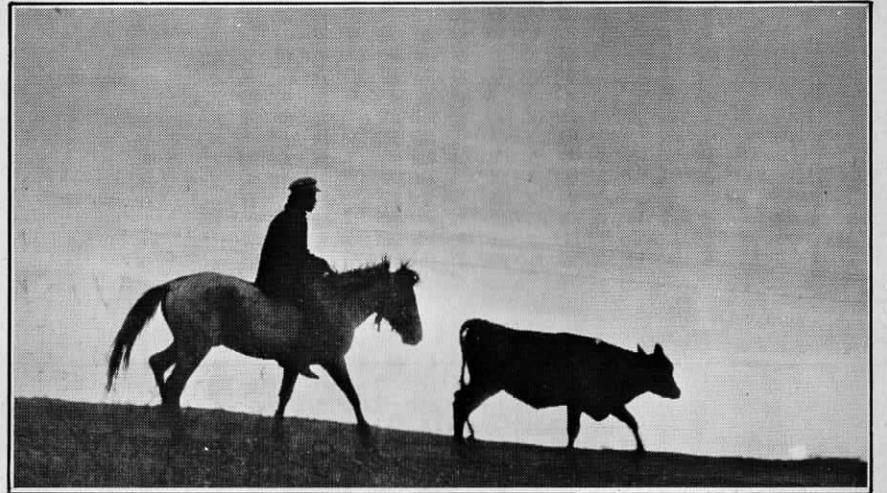


特集 ユートピア

ユートピア論—現代的志向
ユートピアン共同体の歴史
無可有郷から遊動郷へ
ひとつの試み—金峰プロジェクト



わたしたちは、この汚れた現世のはるかかなたにあるものとしてユートピアを夢みるのではなく、今、ここで、生身のまま生きているわたしたちの心奥からの願望のあらわれとして、ユートピアをとらえたい。

どうしたら、人と人が、人と自然とが、のびやかで生き生きとした結びつきの中で共存することができるのか、わたしたちの思いと行いをつくそう。

権力にも、打算にも、憎しみにもよらない自由な関係をつくり出してゆくことで、この重い現実をつきくずしてゆくのだ。

さあ、わたしたちの全身の力を出しあおう……。

ユートピア論—現代的志向



長谷川 進

ユートピアへの視点

表題はいかめしいが、正面きってユートピアを論じようとするのではなく、主として現代におけるユートピアの意義、あるいは今日ユートピアを問題にするとすれば、どのような視点からとりあげるのが、より有意義であるかを考えようとするものである。

いま、ユートピア問題についてはずいぶん数多くの書物が出版されている。さまざまなユートピア物語について知るにはこと欠かないし、種々の立場からのユートピア論も展開されている。私のばあい、どうしてもマルティン・ブーバーの考えに傾くことになり、これから述べることの骨子も、おそらくそれが下敷になっているであろう。

ブーバーのユートピア観は、それだけとしてはかたんで十分ではなく、またさほど独自のものではないかも知れない。だがその含蓄、すなわち現代的意義において重要なものをふくむと考えるわけである。ともあれ、それはこの国で、たぶん外国でも、ごくかぎられた人々以外、一般にはほとんどとりあげられなかったようである。

こうした折、ジャン・セルヴィエの「ユートピアの歴史」(Jean Servier, Histoire de l'utopie, 1967)の邦訳出版が伝えられるのは、うれしいことである。これはブーバーに献じられた書物で、その献辞に、「ユートピアの細道に私の眼を開いたマルティン・ブーバーとのフィレンツェでの邂逅の思い出」とある。これはたぶんブーバーが一九六〇年、ヨーロッパを訪れたさい、フィレンツェで開催の、アラブ諸国からの参加者を主とした「文化協力のための地中海会議」に病をおして出席したときのことであろう。

このセルヴィエのユートピア研究書は、内容ゆたかで独自の見解をふくみ、きわめてすぐれたものであるが、基本的にはブーバーの考えとちがう点が多いように思われる。他方、その影響ないし共通する点も少なくない。マルクスと対比してのブルードンのとりあげ方にもそれが見られ、またキブツを「ブルードンの共同体」と規定しているのは、大いにわが意を得た思いである。だが、キブツをあっさり「ユダヤ国家構成の最初の細胞」として片づけているのは、あるいはキブツの現実に対する判断に根ざしているにしても、これについては何も述べていないし、それだけではブーバーの見方からほど遠いであろう。

そうしたことよりもっと根本的に重要なのは、ユートピアの概念そのものに対する見方のちがいである。これがここでの中心テーマであり、セルウィエの見解はあとでとりあげることになる。

さて、ここでまずユートピアの一般的な意味について述べておきましょう。

ユートピアというのは、周知のように、十六世紀はじめギリシヤ学者でもあったトマス・モアが、ギリシヤ語の *outopia* (どこにもない場所) と *eutopia* (最良の場所) とをつなぎ合せてつくったことばであるという。したがってそれはもともと非現実性と最良、理想ないし完全という二重の意味、つまり望ましくはあるが非実際もしくは実現不可能な場所ないし社会状態を意味したのである。

モアの造語は、いうまでもなく、その後それ以前にまでさかのぼって用いられ、古代、中世、近代、現代にわたってさまざまなユートピア物語が、そうした意味の理想郷、楽園、理想の国家や都市、幸福の島等としてえがかれてきた。

だがそれだけではない。これも多くの論者が指摘していることだが、ユートピア物語には同時に、むしろ根源的には、その時々々の現実社会に対する批判、暴露、攻撃、さらに改革の意図がこめられていたのである。それがしばしば、モアの「ユートピア」についても語られるように、現実批判をわざと架空化し、滑稽化した形でおこなうことも、ユートピア物語の特徴である。マンフォードは「逃避のユートピア」と「改造のユートピア」とにわけているが (『The story of Utopias, 1922—関裕三郎訳「ユートピアの系譜」』)、むしろこれは形の上のことであろう。

ところで、これも周知のことだが、ある種の社会主義思想に、自た見解のことであり、この見地に立たない理論は「空想的」だというのである。しかし「空想的」社会主義者たちといえども、それなりに社会の現実をとらえていたことはいままでもない。

ところで、資本主義体制の現実はその後どう発展したであろうか。マルクス、エンゲルスの見通しとはだいぶちがいが、現代においてはそれがいつそうはなはだしくなっている。彼らの「科学的」理論が、現代社会にどれだけ適合するのか。彼らの思想をとり、その名においておこなわれた社会主義革命の成果は、皮肉なことに、むしろ彼らの思想が、ユートピア的であるより空想的であったことをうたがわせないであろうか。

今日、ときとして「科学からユートピアへ」ということが語られている。それを語る一人は、ひとところたいへん高名だったヘルベルト・マルクーゼである。しかし、くわしいことは知らないが、その「ユートピアの終焉」(清水多吉訳)でみるかぎり、ただこう述べているにすぎない。「われわれは少くとも社会主義の道への理念を『科学よりユートピアへ』と把握しなければならなかったのであって、エンゲルスの言うごとき『ユートピアから科学へ』ではないのである。」

と。その理由の一つは、現代労働者階級の変質という見方にある。だが、結局は「自由の王国」を「労働の中に」、すなわち「労働と遊びの一致」に、いわゆる「美的——エロスの生活」に求めており、それを可能にする社会的条件、社会構造については論じていないようである。

これに対して別の論拠から「科学からユートピアへ」を、すなわちマルクス、エンゲルスが「空想的」としてしりぞけた初期社会主義のうちに積極的な「ユートピア」理念と社会主義そのものの本義

己の基本的立場と相容れないという理由で、「ユートピア的」のレッテルを貼ってしりぞけたのが、マルクスとエンゲルスである。このため、ユートピアということばはその後、積極的建設的側面は背後におしやられあるいは無視されて、空想的という側面が強調されることになった。マルクス、エンゲルスがどのような理由で、サン＝シモン、フーリエ、オウエン等(またブルードンをもふくめて)の社会主義を「空想的」として攻撃したかはよく知られているであろうが、あとでの必要のためと、そこに彼らの考え方の特徴がよくあらわれているので、少し長いが一個所だけ引いておくことにしよう。

「資本主義的生産の未熟な状態、未熟な階級状態には、未熟な理論が照応していた。社会的課題の解決の手段は、未発達な経済関係のなかにまだかくされていたので、頭のなかからそれをつくりだすはかなかった。社会は弊害をしめすばかりであり、これらの弊害をとりぞくのは思惟する理性の任務であった。必要なことは、新しい、より完全な社会制度の一体系を考えだし、これを宣伝によってできれば模範的実験の実例によって、そこから社会におしつけることであった。これらの新しい社会体系は、はじめからユートピアとなる運命にきまっていた。こまかい点までくわしく仕上げられれば仕上げられるほど、それはますます、まったくの空想にはいりこまないわけにはゆかなかった。」(エンゲルス「反デューリング論」)

一見、「ユートピア的」とは、社会の現実根拠を欠き、ただ頭の中で理性により、正義といった観念にもとづいて考えたものとするにあるかのようにである。しかし彼らのいう現実とは、資本主義生産の発展とそれにもなう階級対立・闘争の激化という単純化され

をみだし、それを現代に生かす途を考えたのが、さきのアバーである。この点はあとでとりあげるとして、ユートピアの概念についてもう少しつけ加えよう。

まず、よく知られているカール・マンハイムの説をみよう。マンハイムはその「イデオロギーとユートピア」(一九二九年)でこの問題をくわしく論じている。(邦訳はドイツ語版からであるが、ここではよりわかりやすい英語版から引用する。)

「ユートピア的意識とは、それが生起する周囲の現実の状態と一致していないばあいの心意状態である。」意識が現実の状態と一致していないというのは、それが、経験や思考や行動において、現実には存在しない対象に向けられていることである。しかし、現実と一致しない、現実を超越した、この意味で現実からはなれた意識はどれもユートピア的だというわけではない。とくにユートピア的というのは、それが行動に移されるとき、そのときどきの現実事態を部分的もしくは全体的に破壊しようとする意識だけがユートピア的である。この現実破壊の方向づけという点に、イデオロギーと異なるユートピアの特徴がある。現実を越えた対象に方向づけながらも、いぜん現存事態の実現と維持に有効な意識がイデオロギーである。マンハイムがくわしく論じているものなかには肯けない節もあるが、重要な、あとでふれることになる点だけをとりあげよう。

昔から人間の歴史に働らく願望は、現実によって満たされない場合、空間的、時間的に逃避し、さまざまな神話、お伽話、宗教的彼岸への約束、ヒューマニスト的夢想、旅行小説等を生んだ。しかしこれらはユートピアではない。なぜなら、ユートピアは現存事態に反対し、それを破壊する作用をいとなむものだからである。

なお、マンハイムによると、人間は自己の願望を、歴史のある時期には時間の中に投影し、他の時期には空間の中に投影することによって満たそうとする。この空間の中に投影される願望がユートピアであり、時間の中に投影される願望が千年王国説または至福千年説である。両者はむろん深く関連しからみ合っている。マンハイムも自己の規定するユートピア意識が最初に発現した場合を再洗礼派の千年王国運動にみとめ、その後の形態発展を論じているのである。ユートピアと千年王国説との関連・交錯はセルヴェイエの「ユートピアの歴史」の中心テーマの一つであり、あとでふれることになる。千年王国説のことはあらためて述べる必要はないかも知れないが、それはイスラエル宗教、ユダヤ教におけるメシアニズム、終末論にもとづき、最後の神の審判が下る前に、千年間この世に至福の王国がつづくという神学説に発し、のちにキリスト教においては「ヨハネの黙示録」（とくに二〇章一―六節）を典拠として、中世キリスト教の非正統諸派、再洗礼派、敬虔主義派において強くおこなわれ、いまもアメリカの再臨派につづいているという。

かくてユートピア思想と千年王国説との関連は、問題を当然遠く旧約の世界に結びつけることになるが、これをとりあげる前に、通説では最初のものとされるプラトンのユートピアをみるとしよう。

プラトンのユートピア

プラトンのユートピアといわれる「国家」篇は、正義論を中心のテーマとし、正義と幸福および善とのつながりを論じ、同時にまた「国家の理想」を論じたものであるという。プラトンの複雑綿密な

推論を要領よくまとめることはできないが、あとの預言者のユートピアとの比較に役立つような点を主にとりあげよう。

ところで、ユートピアの基本的原則、理念または価値としてはいろいろのものが考えられてきた。一般的には幸福、完全もしくは完成、調和、豊かさ、善、正義、永遠平和等であり、これらはむろんたがいに関連し重なっているが、とりわけ幸福、調和、完成を第一義的なものとする考え方が多かったであろう。そのためユートピアを完成した不動不変なものとする傾きがあったように思われる。しかし、今日問題とすべきユートピアの理念としては、もつとも基本的なものを一つだけあげるとすれば、それは正義、社会的正義であり、しかも、完全な正義ではなく、不断に変革、更新を旨とする正義であると考えられる。プーバーもユートピアを「人々の共同生活に宿る『正しい』秩序の可能性の展開を意味する」と説いている。正義を基礎理念とする点では、プラトンと預言者とは一致するが、問題はその内実にある。では、プラトンにおいて正義はどのように考えられたであろうか。その大体は、対話の次の個所から知ることができよう。

「われわれが国家を建てた当初から、一般に守られるべき原則として定めたものがあるが、どうもそれが、その一品種が『正義』なのだと思われるのだ。たしかに、われわれは定めたし、たびたび語ってもいるはずだが、君、憶えているかね？ 個人個人は、国家社会のこのうちで、生れつき自分の素質にいちばん合ったことを一つ、日常のつとめとするべきだということ……」それからまた、自分の仕事として、よけいなことには手出しをしないのが『正義』だということもまた、われわれは多くの他人たちから聞いているし、

われわれ自身も、たびたびそう言ってきたはずだ。」（世界の名著プラトンII）

要するに、各人が自己の素質・天分にふさわしいつとめを果すことを説いているのである。その底にあるのは、国家についての有機体的な考え方にもとづく一種の職分思想であろう。プラトンはさらにこの考え方を、人間の魂または精神にもあてはめる。人間の魂には三つの部分がある。(一)植物的（栄養を支える）、(二)動物的（激情を張る）、(三)精神的。それと同じように国家もまた三つの社会階級から成立する（林達夫「ユートピア―プラトンの場合」、著作集5）。

三つの社会階級とは、魂の最下層の部分に対応し、節制を徳とする生産者階級すなわち農民、手工業者と、魂の中間部分に対応し、勇気を徳として法と秩序の維持、対外的防衛にあたる軍人階級と、魂の精神的部分に対応し、知恵を徳とする統治者支配者、要するに精神的貴族とである。あとの二つを合せて「守護者」とよんでいる。ところで、正義という第四の徳は、上記の三つの徳の間に正しい相互関係がおこなわれるところに成り立ち、このことは個人においても国家においても同じである。そして正義は他の徳の「いずれにも力を与えて、それらがその国のうちに生じるようにしてやり、またそれらが生じた以上は、ぎりぎりまで踏みとどまってそれらの安全を保障してやるものだ」と説く。

このような正義の実現をはかるのが、善のイデアを認識する統治者の役目であることはいまでもない。ここに有名な哲人政治の考えが出てくる。「哲人が国家において王であるか、あるいはこの世界の王および王家がよき哲学者であるかして、そして政治的権力と

知恵とが一つに合致しない限りは、国家にとって、否、私の見るところが正しいならば、人類一般にとつて、禍は果てしなくつづくであろう。」（林氏による）これがプラトンの正義の国家を実現するための方途である。

なお林氏によると、プラトンにおいては進歩というものをまるで信じていないという。「彼はすべての社会的状態は一つの悪しき変化であると見なしている。だから、最良の国家への実現の道は、この悪化を阻止し、社会に可能な限りの最大の安定ないし固定を与えることから成り立つ」。ここにプラトンの考えの特徴が指摘されている。だがもう一つ重要と思われるのは、社会的正義の理想を語るかぎりもつとも重大なはずの権力が、まるで問題にされていないことであろう。ここにも預言者との本質的なちがいがあろう。なおプラトンの哲人政治には、『永久平和論』におけるカントの批判がある。

ところで、プラトンがこのように論じた国家は、いうまでもなく、ポリスすなわち都市国家もしくは都市共同体である。これは、たんに都市が一つの国家単位であったというだけでなく、国家以上のものであることを意味し、この点で近代国家とは根本的に異なるのである。イギリスの政治学者アーネスト・バーカーはこれを「一体としての国家と社会」、または「社会―国家融合体」とよんだが、一種の全体主義的国家とも見られるであろう。

もつとも、最近ある専門学者は次のように説いている（太田秀通「スパルタとアテネ」）。ポリスは、「原則としての土地所有農民を基幹部分として、商工業者とともに集中的に居住する市民団の居住地であり、その市民は直接に国家の意志決定者である」。かくて「ポリスはそうした市民団の、平等を原則とする共同体的参加、あ

るいは共同体であった。」「ポリスは、ギリシャ人にとって唯一の価値ある社会であった。」「したがって「ポリスへの献身」が強調されるのは当然であり、「政治的動物」と訳される有名な「ゾーオン・ポリーティコン」とは……「政治家」ではなく、「ポリスをなし、その共同体の成員として、その共同体の中でよく生きる動物」という含蓄のある言葉であった。なお太田氏はプラトンの「国家論」についてこう述べている。

「正義のポリスを実現するために、内紛のない一致協力のポリス体制をつくり出すために、ポリス住民を生産者と守護者に分け、守護者から利己心を無くすために厳格な共有制を強制し、守護者の中から哲学するものが出て、そのフィロソフィアの中で善のアイデアを見つめたものが現実のポリスを支配する、そうしたポリスを理想国家とした。それはポリスの国家形態に実現されたカースト制度にひとしいものであり、職業・身分の固定化がポリスの内部競争を克服する方法であると考えられたのであろう。しかし、それは実現されなかった。」

以上で、プラトンのユートピアを意味する理想国家、正義の国家の大体は明らかにされたであらう。それは、独自の深い哲学思想に裏づけられているにせよ、多数の奴隷の存在は別としても、一種の階級支配の正当づけであるといえるであらう。しかるにこのような政治思想が後代の第一級の思想家、政治哲学者に圧倒的な影響をおよぼしたのは、何故であらうか。もちろんむづかしい問題で、こう割り切っているのは乱暴であらうが、一種の錯覚に由来するといえるのではないかと思う。つまり、共同体には適合する部分のある理論を、共同体的実質を失った近代国家にあてはめるという錯覚もし

いても考えられるであらう。

現に著名なユートピア物語の大部分がプラトンのユートピア、「理想国家」をモデルにしているのである。モア、ペーコン、カンパネラ、ペラミー等々みなそうである。理由をプラトンだけに求めるのは不当かも知れないが、とにかくそれらに共通した特徴は、一口で言えば、その構造が権威主義的なことである。マリ・ルイス・ベルネリはそのすぐれたユートピア研究書(Journey Through Utopia, 1950 広河隆一ほか訳「ユートピアの思想史」)で、「そうした一般傾向の例外をなすものはわずかに、モリスの「ユートピアだより」と、デイドロの「アーガンヴィル航海記補遺」、カプリエル・ド・フォアニーの「未知の地・オーストラリスの新発見」の三つであると論じている。そこで、プラトンのユートピアと対照的もしくは対立的な預言者たちのユートピアをみる必要がある。

預言者のフーユル

預言者のユートピアといっても、何かの社会計画を現実的具体的に示しているわけではない。預言者たちの語ることはユートピアのいわばある精神がしめされているとしか言えないであらう。

おそらく最初にまとまったユートピア思想史を著わしたハーツラーは「ソウジ(Joyce Oramel Hertzler, The History of Utopian Thought, 1923, 1965)」「ユートピアの先駆者」として、アモス・ホセア、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤについて述べている。これは当然、前にふれたユートピアと千年王国説との関係

くは幻想である。

近代国家は周知のように、原理的には自由独立な個人の契約から成り、個人の基本的人権を前提として、それをまもるための人為的な権力機構であることを本質とするものであり、かくして共同体的性格の否定の上に成り立つわけである。それにもかかわらず、近代国家は独特の権力機構のゆえに、従前は他の諸社会集団によって自主的にいとなまれた社会機能をみずからに吸収し、さらに独占する傾向を内在し、このことは、現代全体主義国家のばあいだけでなく、福祉国家においても変りなく、ここでは国民のがわから要求されるだけに、問題はかえって深刻かも知れない。国家がいよいよ多くの社会機能を吸収、独占するとき、そこに国家の、その実、偽りの公共性や共同性に対する錯覚が生まれる。錯覚というのは、その公共性、共同性は個々人の真に自主的な意志にもとづくものではないからである。そうした国家の支配のもとにある社会は、プーバーのことはで言えば、「構造的に貧困な、すなわち「共同体的な内容」の乏しい社会である。このような事態を、マルクス主義は基本的または第一義的に経済的条件の変化に帰するが、より根本的にはそれをも一つの主要要因とする社会の権力構造の変化から説明すべきであらう。

だいわきへそれたようだが、ここで述べておきたかったのは、近代・現代国家は、原理上共同体的性格の否定の上に成り立つたはずなのに、現実にはそれを共同体とする幻想に支持されると考えるべきではないかということである。さらに、このような国家を正当づける学説には、ポリスに関する国家理論、政治観が用いられてはいないであらうか。同じようなことが、本題のユートピアにつ

の問題にかかわるが、さきに預言者のユートピアをみるとしよう。まだ十分な留意がなく、生かじりの引用が多いであらうことを断っておきたい。

まず、預言者とはとなると、語義にも種々の説がおこなわれているようであるが、長谷川真氏によると、「神の意志を伝える神の代弁者の意で、民間からあらわれた社会正義の擁護者」である。聖書ではよく「見張人」とよばれ、たとえば「預言者はわが神の民エフライムの見張人である」と出ている(ホセア書第九章八節)。

預言者の役割についてフロムはこうくわしく述べている(Erich Fromm, You Shall Be As God, 1966, 飯坂良明訳「ユートピアの再発見」)。

(一) 預言者は、人に向って神の存在、預言者に自らを啓示した神がいるということ、そして人間の目標は人間としての完成、つまり神のようになること(ちなみにこれが本書原題の意味)だと宣言する。

(二) 預言者は、人を選ぶべき道を示し、どの道を選べばどんな結果になるかを教える。預言者はこうした選ぶべき道を神の報いとか罰とかいっただけでしるばばあらずが、自分の行いによって選択するのは、つねに人間である。

(三) 預言者は、人が過った道を選んだばあいには、これに異議を唱え、抗議する。けれども預言者は人々を見捨てはしない。預言者は人々の良心として、他のすべての人が黙するときに力強く語るのである。

(四) 預言者は、個人の救いを考えるのみならず、個人の救いが社会の救いと不可分に結びついていると信ずる。預言者の関心は、愛

と正義と真理が支配する社会を打ち建てることである。預言者は、政治が道徳的価値で判断されるべきこと、そして政治的生活はこうした価値の実現をその使命としていることを強調する。」

ここでの問題はこの四の役割につながる。預言者の活動領域は、第一義的には霊的世界であるが、それにとどまらない。

「それはつねにこの世的なものに関連する……神は歴史の中に啓示されるのだから、預言者は政治的指導者とならざるをえない。人がその政治的行為において過つた道をとるかぎり、預言者は反対者、革命家とならざるをえない……彼は、変革の可能性と人々のとるべき方向を見てとり、その見るところを宣言する。」

政治的指導者としての預言者の活動は、社会正義を理念とするといえるであろうが、なお重要なのは、さきにもふれたように、プラトンとちがって世俗の権威、権力をいっさいしりぞけ、むしろそれに敵対していることである。プーバーもある講演で聖書における指導者を五つのタイプ、すなわち族長、字義どおりの荒野での放浪を導いた者、いわゆる士師、王朝創建者としての王、そして預言者に区別し、「預言者は王に、歴史にすら反対する者として選ばれ……支配者のみでなく民自身にも対立する」と語っている（Biblical Leadership, Israel and The World, 1968）。またプーバーは一九三八年四月、ヘブライ大学就任講演「精神からの要求と歴史の現実」で、共に改革に挫折したプラトンとイザヤとをくらべながら、こう語った。

「イザヤは、精神の人（たとえば哲人）が権力者となるべき召命を受けているとは信じなかった。……預言者の本質には、権力をもたず、かつ権力なき者として権力者たちに立ち向かい、イザヤが『布

さらしの野へ行く大路』で（ユダの王）アハズに対して行なつたように（イザヤ書第七章）、彼らにその責任を想起させることがあるのである……彼自身はいかなる権力の獲得をも望まない。このことまさしく預言者という役のもつ独自の社会学的意味を基礎づけるものなのである。」（プーバー著作集8）。

このような反権威・権力の態度は預言者だけのものではなく、イスラエル宗教思想において本来的であり、ユダヤ教、キリスト教にわたるもつとも重要な遺産の一つであろう。それは要するに、唯一の神の信仰のゆえに、神と人間個体との間に介在するいかなる被造物の偶像化をも否定することに由来すると解することができよう。さらにフロムにきくとしよう。

「旧約聖書および旧約よりのちのユダヤ教の伝統の中で……（の）、神および人間の観念……（の）発展……は、まず権威主義的な神と服従的な人間で始まった。けれども、そうした権威主義的な神の中でも、すでに自由と独立の種子の芽えがみとめられる。そもそののははじめから、神への服従は、人間が偶像に服従しないようにいう、まさにそのことのゆえになされたのである。唯一の神を礼拝することは、人間と物を崇拜することの拒否に通ずる。」

預言者は偶像を拒否するとともに、世俗的権力の無益を説いた。「預言者たちによる正義の要求は、これらの人々（みなしご、やめ、貧しいもの、他国人など何の権力ももたない人々）のためになされ、預言者たちの抗議は、富者や権力者たち——つまり、王たちや僧侶たちに向けられた。」「彼らは、正義と愛と神の名において語り、国家と祭司的権力の没落を予言した。」

引用がくどすぎたようだが、これによって、預言者における社会

正義の観念が、プラトンにおける、また古代ギリシャにおけるそれとは遠く異なることが知られるであろう。すでにみたように、ポリスにおける正義は、あるいは極言かも知れないが、偶像化され、宗教的批評の対象とされたポリスの正義にはかならないのである。そこで個人の存在は、ポリスという全体の中に没理せしめられ、その自由はポリスの統治に参加することとおしての自由なのである。

実はこうした考えが、今もかなりおこなわれているのではないであろうか。これに反して、預言者の正義では人間の個としての確立が前提されている。くりかえしになるが、アメリカのユダヤ宗教学研究家ハーバークの説くところをつけ加えよう（Will Herberg, Judaism and Modern Man, 1951）。

「個人の唯一性と正義との擁護は、ヘブライ預言者の偉大な達成の一つであり、それは、預言者の伝統とともにユダヤ教およびキリスト教にはいりこんだ。古代文明は、ギリシャ文明さえも、そうしたことをいささかも知らなかった。ギリシャ思想には個人という形而上的カテゴリーが欠けている。ギリシャ的な物ごとの仕組みにおいては、個人はただポリス（都市、国家、社会、文化）において、ポリスをとおしてのみ救済を見出すことができた。そこでは個人は、社会の全体的要求に反抗しうる有利な歩を占めることもできなかった。……息づまらせるばかりな社会と国家から逃げ出す道も避難所もなく、いかなるプライヴアシーも存在しない。」これが見様によつてはプラトンのユートピアの状況でもあろう。

だが今日、個の確立と人間の尊厳を自覚する現代の人々にとつて有意義なユートピアは、そのようなものではなく、預言者の説いたような社会正義の理念を精神とし、それを可能なかぎり実現するも

のであり、問題は、それがどのような条件においてより可能であるかを探求することであろう。

しかるに、さきにも少しふれたように、セルヴィエのいるところはこれとまったく異なり、理解しがたいものがある。彼はこう説くのである。「わが西洋文明は自己のうちに、約束の地を目ざす前進と始源への回帰、すなわち革命か、君主——哲人の押しつける計画化か——への二重の運動をかかえている。」そしてこの後者がユートピア運動であり、前者が千年王国運動であるという。ユートピアは永遠の現在のうちに描かれ、古代文明の都市への復帰の無意識的意志を特徴とし、「閉ざされた都市」である。これに反して千年王国運動は、父なる神の冒険の執拗なくり返しであり、「神の意志によつて人類の罪を洗い清め、企てを共にする兄弟たちにこの世の幸福を受けつがせるべきあらしである。」

むろんこのわずかな断片でセルヴィエの考えを片づけることはできないし、いくつもの重大な見解をしめしてもいる。たとえば、「ユダヤ教は、聖書について福音書を与え、個人を集団の礼拝から引離し、ただ自己の良心と自己の神とに直面させることによつて、西洋に自己自身を啓示した」という。これは、さきに見たポリスへの埋没偶像化にもあてはまるであろう。それにもかかわらず、セルヴィエはユートピアをプラトンの概念で考えているのである。

ここでは、それとちがって、預言者の精神を理念とするユートピアを、現代のものとして考えようとするのである。これは結局、ユートピアの現代的志向を新しい意味の共同体、コミュニケーションの方向に考へることであり、ここでは当然国家との関係も問題になる。これは稿を改めてあつかうことにしたい。（四月二日）